

編集後記・・・

■本誌に関わるおつうになって7年、息子さんとお別れして6年目で、来年は7回忌となる。5月に故貞子さんに勧誘された鹿児島文化サロンの仲間たちと麓地区の歴史探訪を本田さんの案内で行った。文や話だけでない実地も改めて観察できた。馬酔木を重ねながらも日本のへそのような場所を知ることが出来て感謝している。今回も桐野会長から約2万字の長文を投稿戴いた。酸素ボンベで吸入しながらの口述出筆と聞く。若き日に懸命に生きられた様子を子孫に伝えたいとの思いと推察する。謡曲「美盛」の「其の執心の修羅の業、巡り巡りてまたここに」の文句を思い出す。脱稿に心より敬意を表したい。(中西)

■桐野会長から原稿を頂き早速編集に着手させて頂くと、あの往年のアメリカ映画「カサブランカ」で黒人ピアニストのサムが「時の過ぎゆくまに」をひく場面のことが書かれている。実は、天文館シネマパラダイスで1950～60年代の傑作娯楽映画を上映する「新・午前十時の映画祭」という企画をやっている。昨年の7月に観たばかりだったので場面が浮かんでくるが、今もついで観たいという思いから、田内(おつう)のツタヤに行ってみた。

果たしてDVDが置いてあった。映画「カサブランカ」に浸りながらの編集作業になった。(下土橋)

■鹿児島市の中華料理屋の一軒がもつすべ店を閉じる。徒手空拳で訪日以來、営々と築き上げてきた業績を惜しげも無く捨て、中国に帰郷するらしい。日本に魅力がないのか、故郷は忘れがたいのか、判然とはしないけれども、本人はサバサバしている。我が身を振り返る。縁もゆかりもない国で食べていけるか、成功したとして、はいサイナラと、後ろを見ずに立ち去れるか。はやっていた韓国料理屋もさっさと店をたたんで、こちらは日本で悠々と暮らしている。身辺に関する限り、中韓に完敗の日々が続いている。(濑谷)

「炬ばたセイ談」 第12号

炬ばたセイ談会会長

桐野三郎

編集担当 中西喜彦・下土橋渡・濑谷繁樹

事務局T895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)